
また逢う日まで

たけ10005

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また逢う日まで

【Nコード】

N9976E

【作者名】

たけ10005

【あらすじ】

高校1年生の東馬都子^{とうまみよこ}が小早川智也^{こはやかわとモヤ}と出逢う話です。ネーミングはオチャメしました。自分で言うのもなんですが、女心の勉強になる綺麗な世界観の話です

出逢い

それは、金色に輝く闇

それは、赤く輝く瞳

近づいてくる…”何か”が

…ん

…さん

…うまさん！

東馬さん！

は、はひ！？

私は、跳ね起きた

「ここは、どこ？」

「ふゝん…周り見てもわからないんだあ…」

…あ

しまった。学校だ…どうしよ…

「はひ…ひゅゝるりゝらゝゝ…なあんちゃって」

「廊下に立つてなさい！」

怒られちゃった。

誰もいない廊下。当たり前か。授業中だもん。

あれ？外に誰かいる…校庭の裏庭。授業をサボる人がたまにいる。

今日はなぜか気になった。

「って言っても、授業中裏庭見る機会すら無いんだけどね」

「ふうん…立たされても寝言？もう1時間イットく？」

「い、いえ！もう十分反省した次第であります、隊長！」

「先生です！もういいいわ、中入って授業受けなさい。はゝい、みんな」

なゝ テスト範囲言いますよゝ」

なんだったんだろ、あの人。いつもは気にならない事が気になった。寝不足かな？さあて、今日もラジオ聴くぞゝ

「ヘイ、みんな。ノってるかい？今日も張り切っていくよー！」
変わらない日常。舞い降りたのは、変わった人。しかし、今はまだ、
考えもつかないことだった。

「東馬さん！今日のお弁当は裏庭で食べましょ」

私の親友の景ちゃん。今日もおしとやか。なんでまた私なんかと親
友やってるのかわからないけど、天然娘だから、同じ電波を受信し
たのかも。

申し遅れました。私はラジオ大好きっ子の東馬都子。ピチピチの1
8歳

彼女は藤林景ちゃん。仲良し二人組は今日も今日ととりとめの無
い話で盛り上がる。今日もそのまま、いつも通りの日常が通り過ぎ
るハズだった。あの男の子と出会うまでは。

「私なんかさく彼氏いない歴18年よ。いいわね、モテる景ちゃ
んは」

そうなのです。天然美人はモテるのです。うらやましいかぎりです。
しょんぼり…

「君。その水玉。」

水玉？

「はひ…？なんでしよう…」

あれ？なんで私に声かけたってわかったんだ？…って！今日の私の
ぶりちくなショートが水玉やんけ！

「なんですか！？このエッチ！」

「ごめん、ごめん。あんまり可愛かったから。」
え…？

「かわいい？私が？」

「いや、風になびいて見えたそのパンツ」

「…っ！あんたねえ！」

危うくビンタしたくなる衝動を抑えていると、実はその男、けっこ

うカツコイい。しかも灼眼。珍しい。漫画みたい

…いやいやいや！関心してる場合じゃない

「あのさ、この辺に子猫いなかった？最近昼休みにエサあげてただけ、今日は見なくてさ…」

しかも優しい…

「い、いえ…景ちゃん、見た？」

「いいえ…見たら、お教えしますね。」

「よろしく願います」

なんか、景ちゃんには礼儀正しい。

「あの人、東馬さんに気があるのかな？」

その言葉を認識するには、時間がかかった

「え？なんで？」

「女のカン」

そう言った右手の人差し指を唇に軽く当てる。シーっと言うみたいに

「確かにいい男だけど…って違っ！だからあ、なんで私なのよ！？」

あの男の気になったのは水玉でしょ！？」

…しまった。

「…ぷっ」

「あ！笑った！今笑った！」

そんなこんなで運命の人との出会いはサイアクだった。

「やあ、また会ったね」

ポンと肩をたたかれて振り向くと、変態男。

「昨日はどうも。今度はなんですか？」

「いやなに、近いうちあの友達と一緒に昼食なんかどうかな？って思っ」

「お・こ・と・わ・り・し・ま・す」

「あはは…嫌われちゃったなあ…また今度誘うよ」

また誘うんかい！

「どうせ景ちゃんが目当てなんでしょ？美人ですものね。彼女」

すると、赤面するかと思った男は青くなった

「違うよ、君が…」

「君が？」

「い、いや、なんでもない」

今度は赤くなった

「ふふっ…」

「な、何？」

「いえ、うさぎみたいでかわいくなって思って…あ…」

「うさぎ？」

「ごめんなさい、目。キレイな灼眼だと思って。やだ、恥ずかしい…」

すると

「そっか…俺、智也。小早川智也。じゃ！」

私の名前を言う前に去ってしまった。

小早川さん…その名を噛みしめる前にクラスメートに話しかけられる

「東馬さん。小早川君とはどういうご関係で？」

「は、はひ…？昨日声をかけられたんです。猫さんいなかったか？
つて」

なんだか団体さんになってきた。怖い

「そう…言っておくけど、出し抜きは許さないわよ」

「はひ？どういうことですか？」

「とぼけないで。私達小早川智也ファンクラブを差し置いて、仲良
くなるなって言ったのよ」

「まってください」

景ちゃん…

「なんですか？藤林さん」

「東馬さんは、鈍くてオクテで、その上彼氏欲しがってるわりには
男の子の情報知らないんです」

酷っ！…泣きたい…

「…そうでしたね」

そうなの！？そこは否定して！

「ともかく、彼と仲良くなりたいなら、会費無料の小早川ファンクラブに入りなさい。悪い扱いはしないわよ」「は、はひ…わかりました」

すると、今までの険しい顔から一変、柔らかい表情になった

「よろしい。では、また」

災害は去った。景ちゃんが優しく近づいてくれる

「大丈夫？ごめんなさい。ファンクラブのことくらい言うておけば良かったわ」

「いいの…ありがと。やっぱり私は恋愛に向いてないね…」

「え？」

景ちゃんは目を丸くする。あれ？何言ってるんだろう…？

「なんでもない…」

今日は大変な一日だった

「おい、ぶつかっておいで逃げんのかよ！？」

大変なことになった。チンピラに絡まれた…ぴんち…

「止めておけよ！」

聞いたことのある声

「なんだと…？おい、野郎赤い目だぜ！呪われてんじゃねえの？」

そんなこと言わないで…

「止めてください…」「ああ！？」

「彼のこと、悪く言わないでください」

「なにになに？おめえら付き合ってるの？ぽんこつ娘と赤い目した美少年さんよお」

「止める！」

警察が来た。

「しまった！覚えてろよ！」

チンピラは逃げていった。小早川君が駆け寄って来る
「大丈夫？」

「は、はひ…」

付き合ってる？って聞かれてドキドキしてる…好き…なのかな？

「東馬さん、今帰り？送ってくよ…」

紅い夕日と灼眼…顔も赤いかしら？自意識過剰かな？

「はひ…帰ります…お言葉に甘えて…」

その日、私達は恋人になった。

小早川ファンクラブの皆さんには、それはもうイヤなぐらいにお世話になった。悪い意味で。でも、私達は屈しなかった。

「都子…俺、来月転校するんだ」

それは、突然やって来た。

「はひ？で、でも、会えるよね？」

「他県に引越す…自立するまでは、ほとんど会えない」
なんでこんなことに？

「で、でも！…でも…」

涙が、浮かんでくる

「ごめん、必ず迎えに行く。だから…」

「イヤ…嫌あ！」

私はその場から逃げだそうとした。

「待って！」

強く、引き寄せられる。そして…

「ん…」

kiss…

「智也…」

俺、目のことかわいって言われて嬉しかった」

まだ出会って2日目の日に言ったこと

「覚えてて、くれたんだ…あの頃は冷たくしてごめんなさい」

「俺、あの日よりずっと前から君のこと好きだった」

衝撃の告白。景ちゃんのカンは当たった

その日、私達はつながった。

引っ越しの日

「手紙書くから…」

都子は筆無精だったが、気持ちを込めたかった。もちろんメールする。けど、足りない

「俺も電話する。」

『また逢う日まで』

二人の言葉は同時に出た

「ふふっ」

二人で笑った。しばらく泣くかもしれないけど、今は笑ってさよならする。そう、決めたから…

END

出逢い（後書き）

あんまり人気なかったら、次回いきなり最終回にします。うざいでしょうから。5話外伝2、3の予定です（話数変化の可能性有り）
応援よろしくお願いします！

めぐり違い（前書き）

都子は智也と偶然海で出逢う。智也はバスに乗っていて、すれ違ふ

めぐり逢い

久しぶり！東馬都子です！

あれから1年…あれ以来会ったのは、高校3年の時の15歳の夏。藤林景ちゃんと二人で海の家と砂浜と！景ちゃんのいないすバデーを見に来たよ！

なんか、揺れる胸って良いよね…景ちゃんのお嫁さんになるのかな…智也は全然電話くれない。8割は私から電話してる。。智也のバ力…

ここには美味しいかわからない蜜があるぞ…こんな体じゃ美味しくないか…しょんぼり。

帰り道、偶然海の家の前バス停の近くにいたその時！

「智也？」

そこには、バスに乗り、夏の香りがする智也がいた。おいかわらないけどね

あ…向こうも私に気がついた！手を振ってくる。

「…！」

何を言ってるか聴こえなかった。

でも、聞き返したくてもバスは降り降りが終わったら行ってしまう。私は思わず外から駆け寄る

窓越しに手があわさる。人差し指。中指。薬指。親指。小指。手のひら。

ああ…わかる。心臓の音。都子って呼んでくれる声。全部、全部。

「聴こえるよ、智也。また逢おう！」
ぶるるん！動き出す。

智也はバスを降りようとしてハツとする。予定があるのかな？

もっと。もっとしたいのに…愛してる。智也…

愛おしい人の名前を呼ぶ。それだけで、こんなにも満たしてくれる。

思い出が広がる。初めて逢った時のセクハラ発言。水玉のショートは、キスした日からずっと大事に取ってあるよ！

チンピラに絡まれた時、強くもないくせに、立ち向かってくれたね。最初はびっくりしたけど、心が強い、勇気ある人だっただけで嬉しかった。わかってる？私が交際をOKしたのは容姿じゃない。安心感があったからなんだよ。

離れ離れになると告げられた日。ファーストキスと初めての日。別に、それまで怖かったわけじゃないからね。素敵なシチュエーションを狙ってただけ。ま、待ってたわけでもあるけどね…

みんな、みんな大事な思い出。アルバムをめくるような気持ち。

智也…あなたは今、何を思ってる？

きびすをかえし、バスに、背を向ける。

バイバイ。愛おしい人…

また逢う日まで！

めぐり違い（後書き）

アドリブ小説続編でした。今後は練り上げていきます。面白企画のつもりでした

死（前書き）

夏、バスで智也はなんて言ったか、なぜ連絡少ないかがなんとなくわかる回です。

死

「死んだ」

小早川智也から東馬都子への突然の電話。突然の言葉。海で逢った次の日のこと

「はひ？誰が？なんで？」

「オヤジとお袋。旅行の交通事故で」

「そ、そんな！じゃ、昨日バスにいた理由……」

一瞬の静寂が、全て教えてくれた。バスに乗って病院に行っただ。

智也の両親は、夫婦水入らずの旅行に行く途中だったみたい。

都子がかけてつくと、智也は白い棺の前で一人ぼつんと座っていた。部屋に差し込む光が天然のスポットライトのように照らし、棺は神々しい光を放っていた。

都子はためらいつつ声をかけた。

「智也には私がついてるから」

智也は振り向く

周りはほとんど社交辞令みたいな挨拶を交わした。

智也の灼眼に光は無い。

光輝く棺と光を失った朱い眼。

命失った者と生きし者。

なぜ！？世界中の不条理が都子を襲った。神が降り、救ってくださったのは智也ではないの！？

智也と都子は同じ大学に行く予定が狂って会えなくなった。

”また逢う日まで”その予定が狂ったことは、ただの予定の狂いではなくなった。

タンタンタタリラタンタンタンタンタラリラタッタツン

携帯？智也からの電話だ！

「親戚の家に世話になりそう。その家の近くの大学に通うことになった。ごめん」

「はひ…？何かあったの？相談のるよ」

「ただの、家の事情」（私じゃ、ダメ…なのかな？）

「勉強が忙しい…力が分散されて…だから、だから…」

と、智也は都子にますます連絡をくれなくなった。何の勉強か、聞いても「成功しなかったら恥ずかしいから」と、答えてくれなかった。

都子はラジオ好きなので、パーソナリティーを目指した。景ちゃんはモデル兼ファッションデザイナーを目指した。

大学2年の冬休み、智也と都子は、久しぶりに会った。

ゲームセンターで時間をつぶして映画を観、公園でランチ。ベタなデートだったけど、都子は久しぶりに智也に会えて本当に嬉しかった。

智也はどうなんだろう？口に出してはいけないんだろうな。

「都子…」

木枯らしの吹く中、おやつを取り出そうとした都子の手をとり、消え入りそうな声でつぶやく

「別れよう」

風が吹く。

私の髪がなびく。彼の髪もなびく。

流れる髪。流れる時間。流れる、思い出…

「…もう、ダメなのかな？私達」

「多分」

そう、智也は言い切る。

二人揃ってきびすを返す。

後ろは、振り向かない。もう追いかけないって決めたから…だから…

やっぱり、いやだよ…

でも、いつかまた逢える…いつ、か…ね…

そんな気がする

日が沈む。夕日がキレイ。あの日も、あんな夕日で…出逢いと別れ。違ふ思い出なのに、同じ空。世界は、何も変わってない！

死（後書き）

骨組みはすんなりと、肉付けはわりと断片的に書いてできた話です

再会（前書き）

智也の両親の死。別れ。それらを乗り越えた都子はまた一つ大人になりました

再会

私、東馬都子！あれから3年。20歳になったよ！

ある日、親友の藤林景ちゃんが家に来た

「この雑誌読んで」

「はひい…このグラビア女優、なかなかの上物ですなあ…」

「そうじゃなくて…」

あれ？珍しい。景ちゃんが笑わず、あきれと怒りで顔が大変なことになってる。マジだ

「なにになに？」灼眼の貴公子爆誕！その帝王学に迫る！…智也と同じ染色体異常？」

パラパラとページをめくる

「ひ…？なに、これ…」

そこには、もうしばらく見ない顔があった。小早川智也。元カレ勉強に忙しいって、これなんだ…？

若干20歳にして、いくつもの会社の相談役となり会社を立て直し、電撃デビュー！

資産運用のスペシャリスト、ファイナンシャル・プランナーにもなったらしい。

都子は努力してパーソナリティーになった。でも、都子にとって智也は本当に遠くに行ってしまった。

さらに2年後、都子は智也の噂は聞けど、泣くことはなくなった。新しい恋人もできて…過去は過去と割り切った。それが二人の男への礼儀と信じて…

再会は仕事だった。都子は只今22歳

「今回のゲストは、経済界のスペシャリスト、小早川智也さんです」
当たり前のように名前を呼ぶ都子。智也のこんな顔、初めてだ…仕事の顔。

惚れ直したというわけではなく、都子に愛情あふれる笑顔を向けない
智也に愕然がくぜんとした。

オンエアが終わって、智也に声をかけた都子。

智也…いえ、小早川さん…

振り向く智也。悲しい顔。両親が亡くなった時でも、別れた時とも
違う顔。知らない、顔。

休憩中、智也に話しかける都子

「はひ…もう、違うんだね…何もかも…」

「…それでも、変わらないことがある」

「はひ？」

「お前の…都子の幸せを願う想い」

「…っ！だったら！だったらなんであんな…」

都子は涙を流して続ける

「ひとつ、聞いていいかな？」

「ああ…明日はクリスマススライブだからね…最後のプレゼントだ」

「どうして、私なの？」

「…え？」

「どうして、私を好きだったの？」

「フツ…だったから。」

「はひ？」

「…はひ」は普通じゃないけど、成績は…学校に張り出された点数
は並み。顔も十人並み。でも、頑張ってた。今も、パーソナリテイ
ーやって。夢実現できる力あって、いつもボツとしてるのにやると
きややる。ずっと、ずっと好きだった。」

灼眼はにじみ出る涙を押し出し、顔は笑って。

「私は…」

寸前でスタッフが来た

親友の景ちゃんとカフェでランチ

「景ちゃん…今付き合ってる人いて、でも、ずっと待ってた人が現

れて、私に笑顔と泣き顔見せて…それでも捨てなきゃいけないのかな？」

「一瞬の気の迷いで全てを壊してはダメ。積み上げてきたものは何？」

都子は、立ち上がった。

「智也！」

その後再会を果たした。

あの時と同じ。夕日に当てられた緋色ひいろの世界。あきらめない。あの日私たちは通じ合った。わかりあえた。だから今日も乗り越えられる！

再会（後書き）

あとがき

今回はシリアス最高潮！ラストは、また多少ユーモラスです！

別れ（前書き）

智也の両親の死。別れ。それらを乗り越えた都子はまた一つ大人になりました

別れ

私、東馬都子！あれから3年。20歳になったよ！

ある日、親友の藤林景ちゃんが家に来た

「この雑誌読んで」

「はひい…このグラビア女優、なかなかの上物ですなあ…」

「そうじゃなくて…」

あれ？珍しい。景ちゃんが笑わず、あきれと怒りで顔が大変なことになってる。マジだ

「なにになに？」灼眼の貴公子爆誕！その帝王学に迫る！…智也と同じ染色体異常？」

パラパラとページをめくる

「ひ…？なに、これ…」

そこには、もうしばらく見ない顔があった。小早川智也。元カレ勉強に忙しいって、これなんだ…？

若干20歳にして、いくつもの会社の相談役となり会社を立て直し、電撃デビュー！

資産運用のスペシャリスト、ファイナンシャル・プランナーにもなったらしい。

都子は努力してパーソナリティーになった。でも、都子にとって智也は本当に遠くに行ってしまった。

さらに2年後、都子は智也の噂は聞けど、泣くことはなくなった。新しい恋人もできて…過去は過去と割り切った。それが二人の男への礼儀と信じて…

再会は仕事だった。都子は只今22歳

「今回のゲストは、経済界のスペシャリスト、小早川智也さんです」
当たり前のように名前を呼ぶ都子。智也のこんな顔、初めてだ…仕事の顔。

惚れ直したというわけではなく、都子に愛情あふれる笑顔を向けない
智也に愕然^{がくぜん}とした。

オンエアが終わって、智也に声をかけた都子。

智也…いえ、小早川さん…

振り向く智也。悲しい顔。両親が亡くなった時でも、別れた時とも
違う顔。知らない、顔。

休憩中、智也に話しかける都子

「はひ…もう、違うんだね…何もかも…」

「…それでも、変わらないことがある」

「はひ？」

「お前の…都子の幸せを願う想い」

「…っ！だったら！だったらなんであんな…」

都子は涙を流して続ける

「ひとつ、聞いていいかな？」

「ああ…明日はクリスマスだからね…最後のプレゼントだ」

「どうして、私なの？」

「…え？」

「どうして、私を好きだったの？」

「フツ…だったから。」

「はひ？」

「…はひ」は普通じゃないけど、成績は…学校に張り出された点数
は並み。顔も十人並み。でも、頑張ってた。今も、パーソナリテイ
ーやって。夢実現できる力あって、いつもボツとしてるのにやると
きややる。ずっと、ずっと好きだった。」

灼眼はにじみ出る涙を押し出し、顔は笑って。

「私は…」

寸前でスタッフが来た

親友の景ちゃんとカフェでランチ

「景ちゃん…今付き合ってる人いて、でも、ずっと待ってた人が現

れて、私に笑顔と泣き顔見せて…それでも捨てなきゃいけないのかな？」

「一瞬の気の迷いで全てを壊してはダメ。積み上げてきたものは何？」

都子は、立ち上がった。

「智也！」

その後再会を果たした。

あの時と同じ。夕日に当てられた緋色ひいろの世界。あきらめない。あの日私たちは通じ合った。わかりあえた。だから今日も乗り越えられる！

別れ（後書き）

あとがき

今回はシリアス最高潮！ラストは、また多少ユーモラスです！

最終回 二人の未来（前書き）

智也と再開した都子の未来は！？いきなり衝撃的！最後は目頭があつくなったらうれしいです！最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

最終回 二人の未来

ねえ、ママ？パパのアルバムどこ？

私、都子がついに母になってしまったのです 4歳の娘麗奈がパパの昔の写真見たいって言うから探してるけど、私のはどうでもいいのか、娘よ…

「はひ、あつたよ麗奈」

アルバム見て、思い出話を聞く麗奈

麗奈はハキハキ、しつかりしてる。はひはひ言ってる都子により、反面教師になってる母のせいか、しつかり者の夫似なのか…？

22歳の再会から、半年。また忙しい中小早川智也と会った。

その時、都子が海に行こう！と智也を誘い、智也は嫌がった。なんとカナヅチだったから。最初は意外で笑ってしまったけど、やっぱり人間なんだなあ…って安心したっけ…

智也は腰まで浸かる高さで泳ぎの練習。やっぱり真面目な努力家だなあ…と思ったら、高波がきて溺れる。

「あははっ！智也、間抜け」

「うるせい！…ちよつと潜って」

「はひ…頑張り屋さんの願いを叶えてしんぜよう！」

「無い胸張っても何も出ないよ」

「ひっ！」

無理やり智也の頭を掴んで海に引きずりこむ都子。

しかたがないから、言われた通り潜る都子。

目を開けると目の前に智也の顔が…そしてキス…しよっぱい。でも…智也の味。やっぱり私は智也が好き！安心できて、私を見て…今じゃ声かわいいいけど顔普通と、ラジオ局社内の評価が偏って不満だったけど、景ちゃん、智也は笑顔かわいいいって言ってくれる…

「私もママの笑顔、綺麗だと思うよ！」

ふと、現実に戻る。

みんな、ほめてくれる。普通なのに。でも、珍しくサエてる私はわかった。

愛すべき親友、景ちゃん。愛する夫、智也…そして娘の麗奈。景ちゃんも智也も麗奈もみんな、タイセツナヒト。そして、私もタイセツニ想ウヒト

最終回 二人の未来（後書き）

泣くより、みんなの幸せを押し出しましたが、人によっては感動：してほしいなあ：w最初は出逢いと別れだけを書いたのですから、題名は「また逢う日まで」です。しかし、できるだけ書くことにしました。恋人の話は今回が最後です。只今、蚊から逃げ回ってます。（いないよ、そんな時事ネタ。

外伝1クリスマス（前書き）

見事結婚した都子と智也。今回は娘の話です

外伝1クリスマス

「聖夜の贈り物」

「麗奈、聞いた？サンタクロースっていないんだって…」

「三太クロス？サザンクロスもびっくりね…」

「ボケたよね！？ねえ、ボケたよね！？私本気よ」

「サンタさんがクリスマスチャンなら、」信じるものに」やってくるよ」
そう幼稚園のクラスメイトに答えた麗奈。

しかし、一番残念だったのは麗奈だった。

（今年のプレゼントは絶対欲しいのに…）

口に出したら、手に入らない気がして、一人ごちることもなかった。
父の智也はほとんど飛行機で眠り、家にいない。

母の都子はそんな智也のため、秘書試験と家事とパーソナリティー
の仕事に大忙し。

今年のクリスマスも仕事で、都子は麗奈と過ごしたくて仕事先まで
連れまわす。

クラスメイトの言葉が頭を巡り、たまらなくなった麗奈は、ついに
疑問を口にした

「ねえ、ママ…サンタクロース本当はいないの？」

子供にはウソをつけない。だから大人の行く喫茶店に行って話した。
先に話し始めたのは麗奈だった。

「サンタさん…」

一瞬の静寂。言葉を選ぶべきじゃない。ホントのことを…

「はひ？ロシアの北のナントカランドにいるよ。ねずみいランドじゃなく」

「アイスランド？」麗奈は小首を傾げて情報確かめる

「そう、それ！」

都子はポンと手を叩く

麗奈は、それでも疑惑を解消しきれない

「…ホントはね、サンタさん1人じゃないの。アイスランドに事務所があつて、大勢のサンタさんが世界中からクリスマスカードを受け取って、世界中の子供達に配ってるの。アメリカではポピュラーなのよ」

智也は仕事でいないけど、都子達が家に帰って来ると、プレゼントが家の前に置いてあつた

「私、知らない。」

確かに麗奈の希望したプレゼント。間違いないのに…事務所に送る前に麗奈に確かめた。

「だって、クリスマスカードに書いたって言ったじゃない」

「そうだけど、違うの…」

？なにがなにやら…都子は首をひねる

「希望プレゼント、変わったの」

それは、麗奈の悲痛の叫びだった。都子に似て温厚で大人しい娘が、唇をとがらせて、家にかかる気配も無い。

「そんな…急に言われてもサンタさん、困るわよ…」

「いやなの！パパじゃなきゃいやなの！」

麗奈はかぶりを振る。

すると、星空に雲ができ、雪が降る

「はひ？さっきまで晴れてたのに」

都子は寒くないかと麗奈を見た

ひしゃげた顔は頬を割り、雪が溶けたか、涙かはわからないが銀の糸を垂らす

「希望プレゼント…そっか…で…も？」

人影に気がついた都子。視線を追った麗奈の表情が変わる。パアッと太陽のような笑顔。その先は…

「パパ！」

二人は、同時に呼んだ！愛しい人、智也。

「今まで仕事バカだからな、秘書になる都子に怒られる。幸せにし

てやりたかった。二人とも。一番大事なのは家族だから！ただいま」
「おかえりー！」

皆が喜んだ。都子も麗奈も
メリークリスマス！

外伝1クリスマス（後書き）

サンタは多分アイスランドです。間違えてたら申し訳ございません

結婚式（前書き）

今回は若い人に読んでいただきたいものです。若くない方は、若返ってください！（お前が合わせろ

結婚式

「わたくし、小早川智也と東馬都子との結婚式にご参加いただき、ありがとうございます。本日は私の亡き両親への手紙を持参いたしました」

「両親への手紙」

ザワザワ

参加者は皆、智也の両親の事情を知ってる。人柄まで知ってる人は少ないので、興味からか、にわかに活気づく。

「父さん、母さん、俺はあなた方を失った時は人が変わってしまった。しかし！僕はあなた方と、都子さんの写真を見てた。

撮ったのはバラバラだけど、三人の写真は部屋にもあったし、バツクにもあった。今この世で、俺の心を支えられるのは、都子さんだけです！断言します！」

「ワーー」

パチパチ…

溢れんばかりの喝采。皆涙を流して拍手し、智也の親友も涙を流す。智也も都子も嬉し涙を流して手を握った。

「実は、続きがあります。」

智也はイタズラっぽく笑い、続ける。

「俺は、今まで勉強して、一人でここまでのし上がって来た気だった。覚えてる？初めてファイナンシャルプランナーになるって言ったのは中学3年のことだった。急に進路変更するより、今まで決めた学校で1番狙おう？って言ったのは母さんだったね。父さんは『好きにしろ。』と、ぶっきらぼうに言った。正直、ムカついた。

今は、あの頃は本当に自分のことしか考えてなかったと反省しています。父さんは進路のことなんか興味なさそうにしてたけど、合格発表に来てくれた。俺、初めてわかったんだ。さりげなく俺のこと心配してくれたんだって。今ならわかる。父さんが『好きにしろ』と言ったのは、若いうちに四苦八苦しるってことだったんだね…。母さんも。試験前まで近所の神社に何回もお参りしてくれたんだって、近所のおばさんから聞いた。

俺、高校で引越しまつて都子と離ればなれになるって聞いて、俺の人生めちゃくちやにする気か！？ってキレたよね。俺だって、同じ立場だったら引越するって、今なら思う。

みんな、”今なら”でごめん。本当は”今でも”って言ってやるべきなんだよな？

面と向かって言いたかった。今まで育ててくれてありがとう。ありがとう、ごさい…まし…た…」

都子は優しく微笑んで、手を握り締めてくれる。その手から、よく続けられたわね、偉いわ。って思ってくれてるのがわかる。

父さん、母さん、俺、こんな良い嫁さんもらっちゃった。ありがとう、みんな！

結婚式（後書き）

私は親は健在ですが、皆さんはいかがですか？親孝行、してくださいね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9976e/>

また逢う日まで

2010年10月23日01時37分発行